大人のための歯科講座

～歯科治療の新潮流～

＝⑲＝

歯科技工もアナログからデジタルへ

インレーやクラウン器械で作る時代到来

今回は、ほとんどの方の口の中に入っているインレーやクラウン（かぶせもの）が、現在どのように製作されつつあるのか、についてお話します。

経験のある方が多いと思いますが、通常クラウンなど製作する場合、まずは歯を削って形成します。そして、その形態の印象採得（型取り）をします。嘔吐反射のある方はつらい思いをする、あの型取りです。そこからが違います。まず患者さんに不快な思いをさせてしまう型取りをしません。代わりに形成した歯を直接、専用のカメラでスキャンします。光学印象という言い方をします。

そのデータはデジタルで即座にコンピューター画面に表示され、そこでクラウンの形態が設計されます。ここまでがCAD／CAM（キャドキャム）でいうところのCADの部分。そして、そのデータを削り出し専用の器械が読み取り、セラミックスのブロックを削り出します。そしてクラウンが完成となります。これがCAMの部分。

最終の研磨は歯科技工士の手が入りますが、ほとんど人の手が入らない作業工程になります。製作時間も大幅に短縮し、1時間～1時間半のアポイントで当日にクラウンをセットすることも可能です。今までは1週間後くらいに予約をとってセットだったと思います。

石膏から製作する行程がなくなり、歯科技工士の仕事も変化しつつあります。まだまだ、精度の問題や咬合面形態の問題など、クリアすべき課題もありますが、時代は確実にこの方向に流れています。まだ私の医院では導入できていませんが、いずれは取り組みたいと考えています。変化のスピードが早くこちらもついて行くのが大変ですが、安定した精度の高い補綴物が即日にセットできる時代がもう目の前にきています。

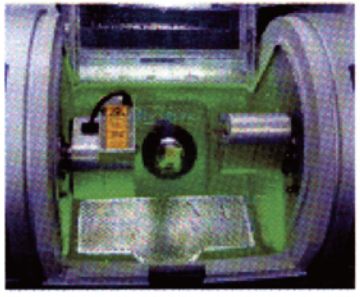
ルーセントデンタルクリニック　名古屋市西区牛島町6の1・名古屋ルーセントタワー3階、電話052・908・8555、URL www.lucent-dc.com。

日本の歯科技工士の技術はすばらしく、この方法で、かなり精度の高いクラウンなり、インレーができてきます。しかし、この流れもデジタルの時代を迎え、変わりつつあります。

歯を削って形成するところは同じですが、石膏模型をおこして、その模型上で歯科技工士が歯にぴったり合うクラウンを製作し、歯科医師が装着前に微調整してセットするわけです。私の医院でもこの流れで行っています。

CAD

形成した歯の形態を画面上に表示し、コンピュータ上でクラウンの形態をデザインする。



CAM

CADで得られたデータが削り出し専用の器械に送られ、セラミックスのブロックがクラウンの形態に削り出される。時間は15分程度。

ルーセントデンタル
クリニック院長
後藤 英夫

＜略歴＞　1998年、東京医科歯科大学歯学部卒業。名古屋大学医学部遺伝子再生医療センター医員、国立長寿医療センター歯科口腔外科勤務などを経て、2008年からルーセントデンタルクリニック副院長。2011年から院長。